



Title	メルボルンの小学校における外国語の教えと学び - オーストラリアの多文化主義とシティズンシップに照らして -
Author(s)	上石, 実加子
Citation	釧路論集 : 北海道教育大学釧路校研究紀要, 第46号: 167-173
Issue Date	2014-12
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7738
Rights	

メルボルンの小学校における外国語の教えと学び

—オーストラリアの多文化主義とシティズンシップに照らして—

上 石 実加子

北海道教育大学釧路校英米文学研究室

Learning/Teaching Foreign Languages in Primary Schools in Melbourne: Through Multiculturalism and Citizenship in Australia

Mikako AGEISHI

Department of English Literature, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

要旨

オーストラリアは、多文化共生社会の課題を政策に反映させながら、移民社会を形成してきた代表的な連邦国家であるが、現在、この国の学校教育は、急激な教育改革のさなかにある。此の度、2014年4月下旬から5月の上旬にかけてオーストラリアのヴィクトリア州メルボルンにある2つの学校、1つは、日本語と英語のバイリンガル学校である州立のコールフィールド小学校、もうひとつは就学前の幼児教育から小・中・高の一貫教育を行っているウェズリー・カレッジの3つあるキャンパスのうち、グレン・ウェイヴァリー・キャンパスの初等教育課程を訪問してきた。本稿では、この2つの学校において、英語以外の言語（特に今回は日本語）の教育がどのように行われているのかを、オーストラリアの多文化主義政策とシティズンシップという国家政策、および言語にまつわる教育政策を概観しつつ論じる。

1. 多文化主義政策とシティズンシップ

1-1 ポスト・コロニアル時代のオーストラリア

オーストラリアがかつてイギリス政府から内政の自治権を付与されていた自治領と呼ばれる植民地であったことはいうまでもない。イギリスから政治的に独立を果たし、連邦を結成したのは1901年、「支配者」と「被支配者」の関係は解消されたかに見えたが、この時からオーストラリアは、イギリスの植民地という立場を返上しつつも、有色人種に対する差別的な移民政策である「白豪主義」を導入し、依然として「支配者/白人」と「被支配者/非白人」の関係を引き継ぐポスト・コロニアルの時代へと突入していった（有満，96参照）。

オーストラリアが白豪主義を解消するのは、第二次世界大戦後に実施した大量移民政策により「多文化主義政策」を導入して以後のことである。1950年代から60年代にかけてギリシアやイタリアなど南ヨーロッパからの、さらには旧ユーゴスラビアなど東ヨーロッパからの移民の受け入れが認められ、60年代後半からはトルコ、レバノンなど中近東からの移民、さらにはベトナム戦争終了後の70年代後半からはインドシナ難民が大量に受け入れられるようになったことで英語を母語としない移民に対する支援の充実が求められたことによる。

すでに1972年、当時のウィットラム労働党政権時代にお

いて「多文化主義」という名称が「公式に採用される」（宮崎，125）と、1975年「人種差別禁止法」が制定されることによって法的な「白豪主義」の解体が告げられ、移民相が「多文化主義」（マルチカルチュラリズム）を導入することで、オーストラリアにおける事実上の「多文化主義社会」が誕生することになった。77年、連邦議会から出された『多文化社会としてのオーストラリア』において多文化主義は「社会的結束」をその基盤に据えることが確認された。翌78年、ガルバリー報告において「移民の定住サービスにおける公正と文化維持の問題が提起され、その後の多文化主義政策の基礎を構築したと考えられている」（青木，12-13）。

1-2 多文化主義政策の転換期

1980年代に入ると、この多文化主義政策は、オーストラリアの経済悪化に伴い、政策に対する考え方に変化がみられるようになる。先述のように、70年代後半からアジア系移民が増加するにつれて、こうした移民がオーストラリアを乗っ取るのではないか、あるいは「非英語系移民の増加が国の統一を妨げ、社会の分節化を進めるのではないか」といった不安を人々に与えた」（川上，71）ため、移民政策そのものを見直すべきとする移民大論争が起きたのである。

2000年以降、「多文化主義」の名を冠した政策は表舞台から姿を消し、その代りに「シティズンシップ」と呼ばれる新たな概念がそれに取って代わるようになる（青木, 14）。「シティズンシップ」はもちろん、大文字のCを冠して「国籍」を意味する言葉であるが、国籍とは区別された「小文字cのシティズンシップ」というものが使われ始めた。飯笹によれば、オーストラリア国籍法50周年を翌年に控えた1998年8月、国籍法を中心とする連邦政府のシティズンシップ政策全般の見直しと提言を行うために、移民大臣の諮問機関として発足したオーストラリア・シティズンシップ評議会が、2000年2月に諮問の結果を踏まえて『新世紀に向けたオーストラリアのシティズンシップ』（ACC 2000）という提言書を公表し、「小文字cのシティズンシップ」の概念が、いかにしてオーストラリアにおける統合のナショナルなシンボルとなりえるのか、つまりオーストラリアを束ねる「統合力（unifying force）」となりえるのかを問うているのだとして（飯笹, 180-181）以下のように指摘している。

多文化主義については、（中略）オーストラリア人を結束する核となる価値を必ずしも強調してこなかったがゆえに、「社会を損なう分裂に対して不必要な怖れを依然として感じている人たちがいる」（ACC 2000: 19）と記述されている。これは、諸文化の共存モデルを提供してきた統合理念としての多文化主義の失敗を、暗に示しているともいえる。（飯笹, 182）

2007年、労働党のケビン・ラッドが、ハワード党首率いる自由党・国民党の保守連合に圧勝し、11年ぶりの政権交代を果たして教育改革に乗り出すが、多文化主義に代わる新たな理念として「シティズンシップ」や「オーストラリアの価値」（Australian Values）といったより包摂性の高い言葉で、オーストラリア国家の国民としての「結束力」を問う方向性へと動き出した。

ラッド首相の側近であったギラードが2009年に副首相兼教育大臣に任命され、ラッド政権下でシティズンシップ・テストというものが開始される。このテストは、シティズンシップ（市民権）の取得を希望する人が、「市民としての義務と権利について適切な知識を有しているかを判定することを目的に開発された」（青木, 15）ものである。多文化主義からシティズンシップへ、このような流れにあって、2010年の8月、ギラード労働党政権が発足した。自由党アボットとの接戦の末の勝利であったが、どちらの議会も過半数を獲得できず、二大政党が均衡状態に陥った。こうしたいわゆる「宙吊り議会」の状態は、「二大政党が掲げる教育政策が類似していたからではないか」（伊井, 29）と指摘されている。

移民国家は、多文化、多宗教、多言語を特徴とする多様性を維持しながら、結束性の高い共同体を構築す

る国是を打ち出さなければならないが、この結束性が強化されると、同化を促すことにもつながり、多文化社会は、常に多様性を尊重しながら結束性も追及するというジレンマに悩まされる。（宮崎, 2012: 8-9）

移民政策と共に問題化してきたオーストラリアの多文化主義とシティズンシップをめぐる背景を踏まえ、2014年の4月末から5月上旬にかけて視察に出かけた、オーストラリアのヴィクトリア州メルボルンにある幼・小・中・高一貫教育のウェズリー・カレッジの特に小学校を中心とした英語以外の言語としての日本語の授業と、日本語と英語のバイリンガル小学校である州立のコールフィールド小学校における日本語の授業について、以下に報告していきたい。

2. ウェズリー・カレッジにおける言語教育

2-1 教育段階

ウェズリー・カレッジ（Wesley College）は、19世紀に開校した男女共学のキリスト教系合同教会の学校である。メルボルン市内に3つのキャンパスを有し、3100名もの生徒数を誇る歴史ある学校である。キャンパスはそれぞれ、メルボルン中心地区から5キロほどのところにあるセントキルダ・ロード（St. Kilda Road）キャンパス、そこからさらに東部方面に10キロほどのところに位置するグレン・ウェイヴァリー（Glen Waverly）キャンパス、中心地区から南部12キロほど離れたところにあるエルスタンウィック（Elsternwick）キャンパスがある。

セントキルダ・ロードとグレン・ウェイヴァリーは3歳から中等教育修了の12年生（つまり日本でいう高校3年生）までの生徒を受け入れており、エルスタンウィックは3歳から前期中等教育の9年生（日本でいう中学3年生）までの生徒を受け入れている。今回は、生徒数1200名ほどのグレン・ウェイヴァリー・キャンパスを訪問してきた。就学前から小・中・高の一貫教育である。

オーストラリアの学校教育制度は、就学前教育、初等教育、中等教育の3段階から成り、6歳から15歳までが義務教育である。州・直轄区間で若干の差異はあるものの、ウェズリーでは、3歳から5歳の就学前教育、6年生までがPrimary Years、7年生から9年生の3年間でMiddle Years、10年生から12年生までがSenior Yearsとなっている。

2-2 ウェズリーにおけるLOTE

生徒たちは、就学前教育を含む初等教育において、言語に関しては、英語と、英語以外の言語（Languages Other Than English=LOTE）を学び、他国からの移民など家庭でLOTEを話す生徒にとっては第二言語となる英語（English as an Additional Language=EAL）のクラスが設けられている。ウェズリーでは、2年生から日本語を学び始める。5年生になると日本語の履修を続けるか、フランス語を履修するか選択することができる¹。5年生で選

択した言語は6年生でも続けて履修することになる。中等教育の始まる7年生からは、中国語、フランス語、ドイツ語、日本語の4つのLOTEの中から1つ選択して9年生まで、つまり義務教育の学年まで学んでいく²。

ヴィクトリア州では、日本でいう高校修了資格に該当するものが3つあり、VCE (Victorian Certificate of Education)、VCAL (Victorian Certificated of Applied Learning)、IB (International Baccalaureate) の資格からいずれかを選択して学ぶことができる。「VCEが一般的で公立私立の学校で広く取り入れられている」(眞田, 55) が、ウェズリーでは、このVCE課程のほかに、国際バカロレア・ディプロマ・プログラム (IB) に参加していることが大きくクローズアップされている³。

国際バカロレア機構 (International Baccalaureate Organization) によるディプロマ資格プログラム (IB Diploma) は、中等教育最後の2年間である11年生から12年生の生徒を対象とした2年間の大学前カリキュラムであり、「統一試験により国際バカロレアの資格取得ができるプログラムで、資格取得者には世界の多くの国々で大学入学資格と同等の資格を有すると認められる」(相良, 15) プログラムで、現在、世界の1,800以上の大学に認められているプログラムである。

ウェズリーのカリキュラムでは、VCEおよびIBの課程に進む者は10年生でもLOTEを履修していなくてはならない⁴。グレン・ウェイヴァリーで提供されているLOTEは、中国語、フランス語、ドイツ語、日本語となっているが、近年、オーストラリア全域において見られたLOTE政策の失敗からか、グレン・ウェイヴァリーではLOTEとしての日本語の履修者が少ない印象を覚えた。

2.3 グレン・ウェイヴァリーでの日本語の授業実践

ウェズリーでは、初等教育課程の2年生から5年生まで、日本語教育が行われる。何より印象的だったのは、グレン・ウェイヴァリー・キャンパスでの2年生の授業である。日本語教師の中には日本人の教師もいるが、この授業は、オーストラリア人教師による英語を使っての日本語の授業であった。この日の授業は専ら日本語の単語をゲーム感覚で学習する授業で、「かに」「イカ」「昆布」「ヒトデ」「タツノオトシゴ」など海のものを絵に描いたフリップをかざしながら、生徒と一緒に発音する。「いか」(烏賊) と「かい」(貝)を互いの逆さ読みで対にして覚えさせたり(図1)、「かに」(蟹)を英語の“honey”(蜂蜜)の発音との連想から覚えさせているのである。



図1 フリップを使った言葉の学習

教師が見せたフリップはその後、日本のカルタになり、3人ずつ代わる代わる対戦する形をとって、生徒たちは教師が言う日本語の単語をフライヤー (ハエたたき) を使って示すフリップを指しながら(図2)、一方では、周りで見ている生徒たちも教師の言う単語のフリップを目で追いながら確認している。

図2 フライヤーで単語を当てるゲーム



早く単語をフライヤーで言い当てた者は、後ろにある自分のテキストブックの裏に貼られたワークシートに、1つスタンプを押してもらえることになっている(図3)。

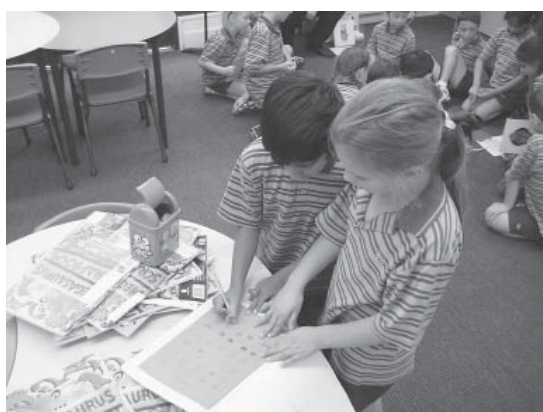


図3 ワークシートにスタンプをもらう生徒

生徒たちは競うようにしてスタンプを集め、学習のモチベーションが高まるよう工夫されているが、そこには、かつての日本語ブームが去った今、生徒たちにLOTEを、なるべく楽しみながら習得させようという教師側の意図が見え隠れしているようにも思える。

3. コールフィールド小学校のイマージョン教育

3-1 ヴィクトリア州におけるバイリンガル小学校

コールフィールド小学校 (Caulfield Primary School) は、ヴィクトリア州に12校あるバイリンガル小学校の中のひとつで、日本語と英語でバイリンガル教育を行う男女共学の州立小学校である。12校のバイリンガル小学校のうち、日本語と英語のバイリンガル校は、このコールフィールド小学校を含めて3校ある。ほかにベトナム語と英語のバイリンガル校が2校、ドイツ語が1校、フランス語1校、インドネシア語が1校、中国語 (北京標準語) が2校、ギリシア語とのバイリンガルも1校ある。また、オーストラリアの手話 (Auslan) 言語を用いる学校が2校入っている。英語と手話のバイリンガル教育ということである⁵⁾。

バイリンガル教育は、第二言語発達を促進するばかりではなく、生徒の第一言語における読み書き能力 (リテラシー) を高める効果があると謳われており、ベトナム語のバイリンガル小学校であるリッチモンド西小学校 (Richmond West Primary School) は、「二つ以上の言語を学ぶことが、英語のリテラシーを高める」として、ベトナム語のほかに、標準中国語のマンダリン語でのイマージョン教育も行っているバイリンガル学校でもある。ハンティングデール・バイリンガル小学校 (Huntingdale Primary bilingual School) でも、「日本語のイマージョンプログラムを行っている」(眞田, 55)。「イマージョン」とは「教授言語ですべての授業を行う」(OECD, 136) ことを言い、コールフィールド小学校における日本語リテラシーの授業は、日本語によるイマージョン教育が行われている。

2-2 日本語リテラシーの授業実践

コールフィールド小学校では、5・6年生の複式学級による日本語リテラシーの授業を視察してきた。日本語リテラシーの授業は週に3回行われることになっている。イースター・ホリデーが明けて第2週目にあたるこの週 (Week 2) の指導案 (Weekly Plan) が以下 (表1) であるが、火曜日、水曜日、木曜日の3日間は、「～することができます」という表現とその使い方を学ぶ週であることが分かる。

“WALT” と指導案の左上にあるのは “We Are Learning To” の縮約であり、これが学習目標ということになる。指導案にあるように、5・6年生複式の授業は、「全体」(Whole) で学ぶ時間と、「グループ」(Part) に分かれて行う学習の時間という2部の構成になっており、最後にまた全体で今日の学びを振り返る。

表1

G5/6 Japanese literacy

Week 2		Tuesday	Wednesday	Thursday
WALT		Understand the content of Information report "Melbourne"	Study how to use ~ことができます。	Study how to use ~ことができます。
Whole		Shared Reading Information report "Melbourne" Check the words みなみ ちいさくて、かわいい やさしい、さかな、にく、 おみやげもの、ふく いちばんおいしい きもちがいい にぎやかで、たのしい How to make a katakana book using iPad.	Shared Reading Information report "Melbourne" Introduce : how to use ~ことができます。 Dictionary form + ことができます。 *みる ことができます。 -をすることができます。	Shared Reading Information report "Melbourne" Review : how to use ~ことができます。 Dictionary form + ことができます。
	Teaching Group Focus: *swap the activities in 3 days	Mari Top group : "ブルーム" Miho 1. Guided Reading top group 2. worksheets - Make a sentence using 2 adjectives bottom group 3. Making a katakana book using iPad (Book Creator) Mid group	1. Guided Reading Mid group : ぶるーむ "ブルーム" 1. Guided Reading Mid group 2. worksheets - Comprehension (Guided Reading) Top group 3. Making a katakana book using iPad (Book Creator) Bottom group	1. Guided Reading Bottom group : "ぶるーむ" 1. Guided Reading Bottom group 2. worksheets - Comprehension (Guided Reading) Mid group 3. Making a katakana book using iPad (Book Creator) Top group
Part	The other Group			
	Whole group			
Whole	Sharing time	What did you learn today ?	What did you learn today ?	What did you learn today ?

最初の5分ほどは、5年生と6年生がそれぞれ二手に分かれて、2人の日本人教師がそれぞれの学年の出席を取り、今日の日付を日本語で確認するなどの時間に割かれる (図4)。



図4 5年生 (手前) と6年生 (奥) による複式学級

その際、生徒はすべて各教室空間の全面に設置されているホワイト・ボードの前に集められ、カーペット敷きの床に座って教師に注目する。教師は、日本語で「～くん」「～さん」を付けて生徒の名前をカタカナ風に呼びながら出欠

確認をした後、5・6年生は一カ所に集合をかけられ、この日の単元について合同で学んでいく（図5）。



図5 合同での学習風景

約15分から20分ほど、スクリーンに映し出された画像と画像に付けられた日本語のキャプションを見ながら、教師から「～することができますか?」の質問に答える形で、「～することができます」もしくは、「～できません」を用いた様々な表現のパターンを学んでいく（図6）。教材はすべて教師による手作りであり、生徒たちが親しみやすい内容となるよう工夫されている。

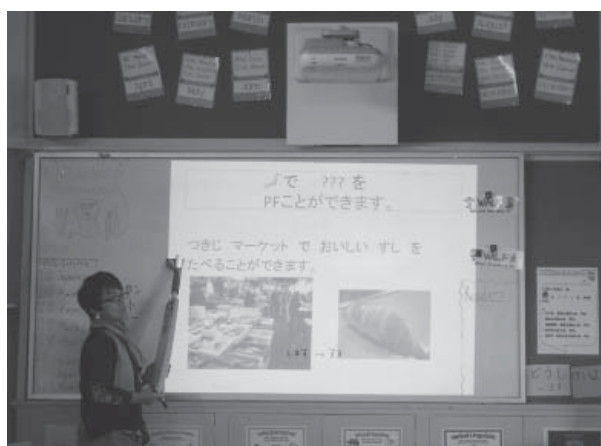


図6 「～することができます」についての学習

この学校では、日本人ボランティアを随時募集しており、日本人留学生やメルボルン在住の日本人らの協力を得て、教師と協同で教材の作成も行っている。日本人ボランティアは、くまなく各生徒に目を配り、授業の中で生徒たちの日本語学習を支え、昼休みなどの授業外時間においても、校庭での遊びを通して彼らを日本語でのコミュニケーション活動に積極的に関わらせる重要な人材となっている。合同での学習のあとは、ある程度習熟度別に組まれた3つのグループ（top, middle, bottom）に分かれてワークをさせる。指導案によると、週3回の授業の中で、別々のワークを3つのグループが交互に行っていることがわかる。

例えば、木曜日では、「ボトム」のグループが日本人教師やボランティアの助けを借りながら日本語で書かれたテキストの音読練習を行い、「ミドル」グループは、テキストの理解を深めるためにワークシートに書かれた設問に答える形式で、読んで書く作業を協同で進めている。



図7 iPadを使って学習するグループ

（図7）のグループは、全員にiPadが配られ、生徒たちは「オーストラリア」を表わす画像を、あらかじめインストールされたファイルから選んで貼り付けると、「オーストラリア」、「メルボルン」などの片仮名をキーボードで打つことで文字化し、“Australia”を日本語で言うと、“Australia”ではなく「オーストラリア」という、生徒たちにとっては別の音になることを、文字と音の両方の側面から体験的に学んでいた。

3-3 Performing Artsの授業実践

コルフールド小学校のカリキュラムは、リテラシーとニューメラシーの基礎がプログラムの中心にある。就学前（Preparatory=Prep）から2年生まで、ニューメラシーも日本語で教えられる。この「ニューメラシー」（Numeracy）とは、「数的処理能力や情報処理能力などをさす」（川上4）。この他、就学前のニューメラシーや、1・2年生複式によるPerforming Artsの授業も見学してきたが、いずれも日本語によるイマージョン教育を行っていた。オーストラリアでは就学前の学年から外国語を教えており、早い時点から外国語教育を始めていることが分かった。

チャップリンのサイレント映画を見せながら、表情豊かなチャップリンの顔つきやその動作に注目させ、それがどのような感情を表わしているのかを生徒に自由に英語で答えさせた後、教師は、喜怒哀楽などを表わす日本語の表現を日常の身近な例を用いて説明していた。どのような場面で、その人物がどんな感情を抱いているのかを考えさせ、それがどのように表現されるのかを、教師のデモンストレーションのあと、生徒自らも演劇を演じるようにパフォーマンスしながら、言葉を体験的に学んでいた。

4. 今後の研究にむけて

以上、オーストラリア、ヴィクトリア州メルボルンにある幼・小・中・高一貫教育を行っているウェズリー・カレッジのグレン・ウェイヴァリー・キャンパスにおける小学校と、日本語と英語の州立のバイリンガル校、コールフィールド小学校における、日本語の授業を中心に報告してきた。教育省より『多文化社会のための教育』（通称「マクナマラ・レポート」）が出され、「多文化教育や非英語系の子どもへの英語教育、バイリンガル教育が実施」（川上, 71）されるようになるのが1979年のことであったが、これまでみてきたように80年代は、経済不況に揺れたオーストラリアにおいて多文化主義政策に疑義が唱えられた。「多文化主義政策」の意味合いが変化していく中で、言語に関して言うなら、1987年に連邦議会から『言語に関する国家政策』（National Policy on Languages=NPL）が出され、「移民の言語を理解しコミュニティの言語を重視する目的で「英語以外の言語=LOTE」政策が承認」（宮崎, 125）されていった。NPLによって、9つの優先学習言語⁶が奨励され、日本語もその中に入っている。そして1989年には、「日本語学習者が急増」（宮崎, 125）という現象が起きるが、今回視察に行った日本語と英語のバイリンガル学校であるコールフィールド学校を始め、他のバイリンガル小学校も強調しているのは、LOTEを学習することがひいては英語の能力を高めるという点である。バイリンガル小学校はベトナム語の学校もあるが、因みにベトナム語は、先の9つの優先学習語の中に入っていない。

また、アジア言語文化特別教育プログラムが1995年から2002年に渡って導入されるものの、「オーストラリアのLOTE政策は凋落の一途をたどる」（宮崎, 2012: 8）という報告もみられる。すでに1990年代以降、「多くの初等中等教育機関でLOTE教育の必修化を取りやめるようになった」（宮崎, 8）こと、このような中であって、ウェズリー・カレッジにおける日本語教育の在り方をどのように位置づけたらよいのか、あるいはコールフィールド小学校における日本語のイメージ教育が、大きな枠組みとしてオーストラリアの国家政策からどのような影響を受けているのか、今回の視察だけでは到底不十分であることは言うまでもない。

オーストラリアは、日本とは異なり、州・直轄地区によって学校教育制度もカリキュラムも統一されていない。今後はオーストラリアにおけるナショナル・カリキュラム検討の動きを探るなかで、両学校がどのようなカリキュラム策定を行い、言語に関する教育プログラムを試みているのか、引き続き調査・検討を行っていききたい。

註)

1. Wesley College, *Curriculum Guide 2014. Glen Waverly Campus. Primary Years (Early childhood to Year 6)*, 2014. p.12.
2. Wesley College, *Curriculum Guide 2014. Glen Waverly Campus. Middle Years (7, 8 & 9)*, 2014. p.14.
3. ウェズリー・カレッジのパンフレットには、「2013年のウェズリー・カレッジは国際バカロレア（IB）校としてヴィクトリア州首位、共学制IB校として全国首位の成績を誇る」と紹介されてある。（Wesley College: True Education. Feb. 2014.より）
4. Wesley College, *Curriculum Guide 2014. Glen Waverly Campus. Senior Years (10, 11 & 12)*, 2014. p.14.
5. ヴィクトリア州にある12のバイリンガル小学校

School	Languages
Abbotsford Primary School	Chinese (Mandarin)
Aurora School	Auslan
Bayswater South Primary School	German
Benalla East Primary School	Indonesian
Camberwell Primary School	French
Caulfield Primary School	Japanese
Footscray Primary School	Vietnamese
Gruyere Primary School	Japanese
Huntingdale Primary School	Japanese
Kennington Primary School	Auslan
Lalor North Primary School	Macedonian Modern Greek
Richmond West Primary School	Chinese Vietnamese

6. 優先学習言語とされている9言語は、日本語のほかに、イタリア語、ギリシア語、フランス語、ドイツ語、アラビア語、中国語、韓国語、インドネシア語となっている。

引用文献

- 相良憲明・岩崎久美子編著『国際バカロレア—世界が認める卓越した教育プログラム』赤石書店、2007年
- 青木麻衣子「第1章 社会・教育・子ども」佐藤博志編著『オーストラリアの教育改革—21世紀型教育立国への挑戦』学文社、2011年、7-26頁
- 有満保江『オーストラリアのアイデンティティ』東京大学出版会、2003年
- 伊井義人「第2章 教育行政」佐藤博志編著『オーストラリアの教育改革—21世紀型教育立国への挑戦』学文社、2011年、29-50頁
- 飯笹佐世子『シティズンシップと多文化国家:オーストラリアから読み解く』日本経済評論社、2007年

- OECD編著『移民の子どもと学力——社会的背景が学習に
どんな影響を与えるのか』齋藤里美監訳、木下江美、
布川あゆみ訳、赤石書店、2007年
- 川上郁雄「移民の子どもへの英語教育とマルチマルチュラ
リズム」早稲田大学オーストラリア研究所編『オース
トラリア研究—多文化社会日本への提言』オセアニア
出版社、2009年、65-88頁
- 「オーストラリアのESL教育の流れと論者たち」川上郁
雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野中広編『「移
動する子どもたち」のこたばの教育を創造する ESL
教育とJSL教育の共振』ココ出版、2009年、2-7頁
- 眞田まこと「日本の留学生施策政策への提言」早稲田大学
オーストラリア研究所編『オーストラリア研究——多
文化社会日本への提言』オセアニア出版社、2009年、
46-62頁
- 宮崎里司「多文化共生社会の言語政策におけるジレンマ—
センサス (census) と市民権テスト (citizenship)
からの提言」オーストラリア学会編『オーストラリア
研究』第25号、2012年3月、7-11頁
- 「LOTEの終焉から学ぶ—社会政策としてのPolicy
Activism」早稲田大学オーストラリア研究所編『オー
ストラリア研究—多文化社会日本への提言』オセアニ
ア出版社、2009年、125-145頁
- Wesley College, *Curriculum Guide 2014. Glen Waverly
Campus. Primary Years (Early childhood to Year 6)*,
2014.
- Wesley College, *Curriculum Guide 2014. Glen Waverly
Campus. Middle Years (7, 8 & 9)*, 2014.
- Wesley College, *Curriculum Guide 2014. Glen Waverly
Campus. Senior Years (10, 11 & 12)*, 2014.